

自分責めず、特性理解して

2歳半の男の子を連れて受診した30代の母親。子どもが2歳になっても意味のある言葉を発しないので、保健センターから医療機関の受診を勧められた、とのことでした。

子どもは、診察室にあるたぐさんのミニカーや電車に興味を持ち、すぐに遊び始めます。椅子に座って、と指示するとちよこんと座れました。活発で、遊びに飽きると母親のひざに乗りうつろするなど甘える様子も。一方、母親は子どもが椅子から立ち上がると即座に「座って」「じっとして」と注意します。子どもは後ろを向いたまま。母親は明らかに怒っています。私の前なのでそれ以上怒るのは我慢しているようでした。

母親は「私は母親なのに、子どものことが全く分からない。子どもが好きになれず、赤ちゃん

の時から授乳後はさっさと遠ざかり、泣きやまないと家に置き去りにして外出していた」と話します。「私の関わり方がいけないから言葉が遅いんですね」と後悔していました。

私の返事はこうです。「言葉はお母さんのせいではなく、子どもの発達の特性にあります。発達障害の可能性があるので、神経学的な診察や知能検査などを通して特性を明らかにし、一緒に理解していきましょう」。発達に大きな問題がなくても、赤ちゃんはなかなか親の思い通りの反応をしてくれませぬ。発達に偏りがあればなおさら。親は自分の子どものことは全てわかると思いがちですが、赤ちゃんは生まれた瞬間から親の分身ではなく別の人間です。

赤ちゃんのことを分かるように

しない親は自分の気持ちが子どもにも伝わらないとすぐに叱りつけてしまう傾向が強いです。

私は、決してそのような親を責める気持ちはありません。特に核家族の親にとって、子育ては未知の冒険のようなもの。「子育て号」という船を出してはみたが、どちらへ向かっていけば良いのか分からないこともしばしばでしょう。

発達外来の重要な仕事に、子育ての困難さに対する支援があります。心理療法、言語療法、音楽療法など多くの支援を活用して親と一緒に子どもの成長をスモールステップで見つけていきます。子どもを好きになれなかった母親も、子どもの特性の理解が進めば、必ず心から笑顔で向き合うことができるようになります。自分を責めることはしないのです。

独協医大越谷病院

子どものこころ診療センター

教授 作田亮一

診察室

から @ 埼玉 子どもを好きになれない親

